

「能動的・自律的な学びを支援する 学習環境の設計・構築・実践」

特集号の発刊にあたって

笠井 俊信

(岡山大学大学院教育学研究科, 学会誌編集委員会幹事)

1. はじめに

近年, PBL (Project/Problem-based Learning), 反転学習など, 学習者の能動的な学習を促すための学習・教育手法やそのなかでの ICT の活用が注目されている。大学だけではなく初等・中等教育機関においても, 組織的にこのような学習形態を取り入れる事例も増加している。また, 職場での学びやアルバイト・ボランティアなどインフォーマルな経験を通じた学びの重要性に関する認識も高まっている。これらの学習・教育は大きな効果が期待される一方で, 綿密な教授設計を行わないと, かえって教育効果が低下してしまうことも起こりうる。また, 経験を通じた学びは偶発的な要因に左右されるため, 教育効果を担保することは非常に困難である。以上のような状況を踏まえ, 本学会誌では, 「能動的・自律的な学びを支援する学習環境の設計・構築・実践」に関する特集号を企画した。本特集号では, 「能動的な学び」「自律的な学び」のいずれかに関わる学習支援環境の研究を幅広く対象とした。

2. 論文の投稿数と判定結果

2016年6月10日のエントリー締め切り, 2016年6月17日の論文投稿締め切りを経て, 最終的に23編(原著論文5編, 実践論文11編, ショートノート3編, 実践速報4編)の投稿があった。査読においては採録の可否の判断とともに, 特集号のテーマである「能動的・自律的な学びを支援する学習環境の設計・構築・実践」に関する成果が盛り込まれているか否かについても厳正に審査した。最終的な採録は13編

(原著論文2編, 実践論文4編, ショートノート3編, 実践速報4編)であり, すべてが本特集号の趣旨に一致すると判断された。採択率は57%となり, 例年に比べかなり高い結果となった(昨年度の採択率: 45%)。採録された論文には, 学校教育だけではなくさまざまな状況での能動的・自律的な学びを支援する学習環境についての取り組みが含まれており, 本特集号の企画意図に沿ったものとなった。

近年の急速な技術の進展によって, 誰でもいつでもどこでもさまざまなことを学ぶことが可能となり, 本特集号のテーマである「能動的・自律的な学び」を支援する学習環境に対するニーズはより高まると考えられる。本特集号で採録された研究も含め, 「能動的・自律的な学びを支援する学習環境の設計・構築・実践」が今後さらに発展していくことを期待したい。

3. 特集論文研究会

今回で8回目となる研究会委員会と連携した特集論文研究会が, 2016年3月19日に東京工芸大学中野キャンパスにおいて開催された。特集論文研究会は, 著者が希望した場合に通常の発表よりも質疑応答の時間を長くするとともに, あらかじめ研究会委員と編集委員が原稿を読みコメントを提供することで, 特集号へ投稿する際の論文執筆の参考にしてもらおうという主旨で行っているものである。今回の特集論文研究会では, 全34件の発表のうち22件の発表でコメントが希望され, 3会場にて活発な議論が展開された。

特集論文研究会の発表を経て本特集号に投稿された論文は14編(原著論文4編, 実践論文8編, 実践速報2編)であり, 採録された論文は8編(原著論文